

インダス文明研究への招待

宗墓秀明

インダス文明研究への序章

アジアにおける考古学が、大航海時代を経たヨーロッパ各国のアジア地域への進出をきっかけに近代化を進めたと同様に、南アジア考古学研究も18世紀後半のイギリス人によるベンガル＝アジア協会の設立に始まる。同協会で紹介されたサンスクリット文学、プラーフミー碑文、錢貨(コイン)は、ヨーロッパの言語や貨幣との関係からヨーロッパ人たちを強く刺激した。同時に植民地経営を円滑に進めるために必要とされた旅行記を始めとする地誌・地理学の進展によって、記念建造物の記録化や先史遺跡・遺物発見の報告が続々となされた。この南アジア文化を探るイギリス人による一種のサロンであった同協会の活動を礎にして、後の1861年にインド総督府機関としてのインド考古局設立によって、当地での本格的な考古学調査が始まる。初代調査官、後には初代長官となるカニンガム(Cunningham, A.)がインド亜大陸全般に渡って精力的調査を行うが、なかでも鉄道施設工事によって大量の煉瓦が持ち去られ、破壊の進んでいた遺跡でインダス式印章や石刃を採集したもの、当時はそうと気づかなかったインダス文明都市ハラッパー(Harappā)遺跡の発見がインダス文明研究の始まりとして挙げられる。19世紀初頭に3代目考古局長官となったマーシャル(Marshall, J.)は、エーゲ海周辺での調査経験を基に、英領インドにおける文化財の保護とともに調査体制の確立に努め、インド人研究者育成を伴う組織的発掘調査を行った。また、彼の元で育てられたサハニ

(Sahni, D. R.)を1920年末にハラッパー遺跡に、同時にバナルジー(Banerji, R. D.)をモエンジョ・ダロ(Moenjodaro)遺跡の調査へと向かわせ、1921年には両遺跡から全く同じような印章、石刃、彩文土器が発見され、ともに仏教時代を遙にさかのぼる金石併用期の文化遺跡であることが確認された。1922年に始まるバナルジーとマーシャルによるモエンジョ・ダロの発掘は、予想だにしなかった焼成煉瓦で作られた大規模な都市遺跡を確認し、これをどう解釈すべきか大きくゆれた。バナルジーは、出土したインダス式印章に刻まれた絵文字的な図像をクレタのミノア文明の絵文字に対比させ、モエンジョ・ダロはクレタ文明の影響下にあった遺跡だと想定する。南アジアの人々に、自らの地域に紀元前の先史遺跡の存在を認めさせた意味は大き

かったが、ミノア文明と直接比べるのは突飛であった。その後、ガット(Gadd, J. C.)がインダス式印章を集成する中で、メソポタミア地域のキシュ(Kish)、ラガシュ(Lagash)、スーサ(Susa)、ウル(Ur)からも同様の印章が出土していることを確認し、モエンジョ・ダロのおおよその年代を比定する。その後、メソポタミアや北西イランとの関係を示す他の出土遺物や、ベーダ文献に記述されているアーリアを自称する人々の破壊した城塞がモエンジョ・ダロなどの焼成煉瓦の遺跡だろうとの想定から上限を紀元前2500年、下限を紀元前1500年までと考えられるようになった。このようにインダス文明遺跡の発見当時は、他地域、特にメソポタミアとの比較からインド亜大陸に初めて確認された先史文明の年代比定を行った。

1940年代、インド亜大陸のイギリス統治最後の時期に考古局長官に任命されたウィーラー(Wheeler, R. E. M.)は、南アジア考古学に層位学とトレンチ調査の手法を持ち込み、彼自身はラッパー遺跡の城塞部にトレンチを入れ、インダス文明期城塞のより下層に異なる文化の土器を見いだし、インダス文明の成り立ちを考えるうえでの重要な発見をもたらす。こうした状況のなか、「飛翔するアイデア」という言葉を用いたウィーラーに代表されるよう、すでにティグリス・ユーフラテス地域に出現していた都市という概念がインダス地域にもたらされ、西アジアの影響下で南アジアにインダス文明都市が成立したとする解釈がほぼ定説となって広がっていく。

しかし、誰もいない所に突然都市が作られるわけもなく、より時間的に遡る文化を求める調査が始まる。そこには、独立後まもない人々にとって、自らのアイデンティティーを確認するための探求があった。

新石器文化

南アジアにおける最も早い植物栽培農耕生活は、メヘルガル(Mehrgarh)、キリ・グール・ムハンマド(Kili Gul Muhammad)、グムラー(Gumla)遺跡などに見ることができ、いずれも西アジアと同様に大河川沖積地ではなく、季節的な天水を容易に利用できるバルーチスタン(Balochistan)丘陵域の小河川沖積地、もしくは扇状地においてである。

1960年代までは、南アジア新石器文化最古の文化層を持つと考えられていたキリ・グール・ムハンマド遺跡の下層、I期からの土器の出土はなく、いわゆる無土器新石器文化の段階ですでに農耕が始まっていたと考えられた。同様の無土器新石器文化は、北部バローチスタンのゴーマル(Gomal)平野の河岸微高地に位置するグムラー(Gumla)遺跡のI期にも見ることができる。こうした南アジアに興った初期農耕の様子を、より明瞭に残しているのがメヘルガル遺跡である。

メヘルガルは丘陵地のクエッタ(Quetta)からインダス平原の西端へと流れ込むボーラン(Bolan R.)河畔に位置する。前7千年紀前半と思われるIa期から、二条オムギ、六条オオムギ、一粒コムギ、二粒コムギとパンコムギが、さらにこれらの作物を刈り取るために鎌石刃や製粉のための磨石も出土している。つづく Ib期からはムギ類に加えて、ナツメの種子も発見され、すでに冬作物と夏作物の栽培を始めていることがわかる。このような栽培植物に加え、動物の家畜化が進められた様子を出土獣骨に見ることもできる。とくに Ib期にはウシ、ヒツジ、ヤギの家畜が全獣骨の8割近くを占めるなか、家畜コブウシが最も優越する家畜種となっており、現在も見ることのできるコブウシ飼育を伴った南アジア農耕文化の特徴をこの時期より示している。

家屋はIa期よりすでに日乾燥瓦で造られるが、Ib期になると、家屋は大型化し、各部屋に炉址と磨石・石皿が発見される複数の部屋から成る建物へと変わる。そして、円形の集落を囲うように稜堡付きの周壁の一部がこの時期に確認されている。周壁内には住民の墓も発見され、日乾燥瓦で蓋をされた土壙墓が、居住域との明瞭な分離を示すことはなく廃棄された住居跡地に作られた。この時点までは、無土器新石器文化であるが、貯蔵などに用いられる土器は集落が12ha程にまで拡大する前5千年紀のII期に現れる。

このように、前7千年紀に始まった南アジアの農耕文化は、冬作物のムギ類と夏作物のナツメ栽培に、ウシに重きを置いた家畜を伴い、周壁を備えた集落を形成したことを見特徴としている。そして、この後、より定住度の増した集落と文化をバローチスタン丘陵の各盆地に展開させる。

バローチスタン農耕文化

インド亜大陸の北西に位置し、イラン高原へと連なるバローチスタン州は、その東に位置するインダス流域平原のシンド(Sind)およびパンジャーブ(Panjab)州から、スレイマーン山脈(Sulaiman R.)とキルタール山脈(Kirthar R.)とで隔絶され、州内の地勢のほとんどが標高700m以上の丘陵地帯によって占められている。丘陵のなかでも

3000m級のクエッタ北方のザルグーン山系(Zargun R.)とカラート(Kalat)東方のハルボイ山系(Harboi R.)、そしてアラビア海へとせまる低丘陵地帯とによって、この地域は大きく3つの地方に分けられる。北部のジョープ・ローララーイー(Zhob-Loralai)地方とクエッタ、中部のカラート地方、南部のフズダール(Khuzdar)地方である。各地方には北部のゴーマル川とジョープ・ローララーイー川、中部のシーリン(シャリナープ)川(Shirin R.)やギーダル川(Gidar R.)、南部のギーダル川が名前を変えたナール川(Nal R.)、それにポラーリ川(Porali R.)が南北流し、バローチスタン丘陵内の盆地を南北につないでいる。また、クエッタでは主要河川のボーラン川が、その他の地方でもゴーマル川、アンジーラ川(Anjira R.)、オルナチ川(Ornachi R.)などの河川が、南北に高く聳えるキルタール山脈、スレイマーン山脈を抜けて、東のインダス流域平原へと流れ、バローチスタン丘陵と東の平原部との交通路となっている。

このような流域盆地を分離すると同時にそれらを南北と東西に結び付けるバローチスタン丘陵を流れる中小河川の河岸段丘や微高地に立地したバローチスタン農耕文化は、流域毎の地方化と統合の繰り返しを何度もみせるが、いずれも季節的な冬雨や雪解けの一時的な増水時のみ流れる河川氾濫原微高地や河川流域平地に立地し、流下土壤堆積を期待し、排水に手間をかけない農耕生産に制約されて可耕地は限られ、遺跡それ自体の規模の拡大に制限があったようである。現代に残るガバルバンドはこうした農耕の姿を今に伝えている。しかし、こうした農耕社会もボーラン川が平野部に下り立ったカッチャー(Kachhi)平野とゴーマル川の下流沖積地のゴーマル平野に進出するに及んで、次第に生産力を高め、南北550m×東西400mの街全体を周壁で囲み、周壁に平行して建てられた建物が密集する内部が東西のメインストリートで二分されたラフマーン・デーリ(Rahman Dehri)遺跡が近年非常に注目されている。

町邑の出現

前3千年紀に入ると、バローチスタンの農耕文化社会の中で、中部から北部一帯にクエッタ式土器、ファイズ・ムハンマド彩文灰色土器(Faiz Mohammad painted grey ware)、ウェット土器(Wet ware)やジョープ(Zhob)式母神像と牛形土偶が多くの遺跡からおしなべて出土する様な文化的統合の動きが始まる。この時期を代表するクエッタのダンブ・サダート(Damb Sadaat)III期初頭は、高さ6m、幅9mの巨大な泥煉瓦基壇に覆われる。基壇には半地下式の貯蔵穴と石灰岩で補強された深さ1mほどの排水溝が設置されるほか、基壇上からはジョープ式母神像、さらに基壇の基礎下からはヒトの下頬骨が出土する。柱穴

を伴う基壇に、半乾燥地帯でありながら排水溝が設置され、儀礼的土偶や人身供犠を思わせる遺物が出土するこの状況は、基壇が何らかの儀礼的行為と結び付いたものであったことを示している。III B 期に基壇はさらに拡張され、遺跡の大半を占める。また、南部バローチスタンでも、ナル式多色彩文土器 (Nal polychrome painted ware) に代表される文化が石積み基壇建物を特徴とする文化を展開し、後にハラッパー文化とも共存するクッリ文化を形成する。このようにバローチスタン丘陵の文化は、南部と北・中部の大きな文化的統合圏を形成しつつ、主要遺跡では記念建造物を作り上げて地域的求心力を強めるが、その顕著な例が丘陵を下り立ったインダス平原西縁に位置する3つの遺跡に見ることができる。

最下層の I A 期より周壁を備えていたゴーマル平野のラフマーン・デーリは、その後も町のプランを維持踏襲し続け、そこには何らかの管理機能が働いていたようである。一方、インダス平原に連なるボーラン峠麓のカッチー平野に位置するメヘルガルは、そのVI期に $10 \times 25 \times 50\text{cm}$ と $10 \times 22 \times 45\text{cm}$ に規格統一された日乾燥瓦を積みあげた稜堡を備えた矩形の周壁が200haに及ぶ居住域の周囲に築かれる。周壁の中には穀物集積施設に伴って、大量の磨石と炭化したオオムギ、コムギ、オーツムギが出土する 10×7.6 メートルの煉瓦敷き製粉施設が現れる。つづくVII期には、100個体を越える壺が収められた半地下式の貯蔵室をもつ建物も現れ、集落内での穀物大量集積が行われると同時に、周壁の南側外には 300m^2 以上の煉瓦積み基壇も現れる。さらに、バローチスタン南部でもアムリー (Amri) が、丘陵の最も東端まで進出した丘陵地域の文化として展開する。I c 期に 6 ha の遺跡全域に居住域が広がると同時に、内部が小さく仕切られた穀物貯蔵庫と思われる建物が数多く現れて、人口の増大と余剰生産物の収納が見られる。この後、II b 期になると集落は周壁に囲まれ、内部には日乾燥瓦による柱穴をもつ基壇が現れる。

このように新石器文化以降次第に発展してきたバローチスタン丘陵の文化は、ダンブ・サダートなどの丘陵域からラフマーン・デーリ、メヘルガル、アムリーのインダス平原に面した諸遺跡が基壇構築物や周壁を備え、煉瓦の規格化、町プランの継続的維持など、何らかの強力な統治機構の存在を示唆する地域的拠点遺跡を生み出したようである。しかし、これらの文化が直接インダス文明を生み出したとは考えられず、町邑段階のバローチスタン文化遺跡の上層では常にハラッパー式土器の混在が確認され、その最終段階においてハラッパー文化と一時的に併存していたことが確かめられている。すなわち、インダス文明を支えたハラッパー文化の広範な展開のなかで、ダンブ・サダートはIII C 期に基壇を失った後に終焉を迎え、アムリーは II

b 期の上の灰層を挟んでハラッパー文化遺跡へと変遷する。また、メヘルガルとラフマーン・デーリでは近隣のハラッパー文化遺跡ナウシャロー (Nausharo) とグムラーに地域的拠点が移動する。こうした遺跡の変遷と各地域毎における主要遺跡の移動の姿に、バローチスタンの西方に存在する鉱物資源獲得を巡る、バローチスタン拠点集落とハラッパー文化もしくはインダス文明との葛藤、そしてインダス文明側の政治的・経済的意図を窺うことができるものと筆者は考えているがどうであろうか。

コート・ディジー文化：平原部の開発

バローチスタン農耕文化が町邑段階を迎えた前3千年紀前半、インダス川とその支流が作り出した広大な平原部では、パンジャーブ地方南部からガッガル＝ハーカー＝クラー涸河床 (Dry bed of Ghagar-Hakra=サラスヴァティー川 Saraswati) 沿いとシンド地方北部にまで広がるコート・ディジー (Kot Diji) 文化が展開した。示準遺跡のコート・ディジーは、文化圏最南部のシンド州北部のサッカル (Sukkar) 近郊のコート・ディジー村に位置する。遺跡は、大きく上下2つの文化に分かれ、上層がハラッパー文化とされる一方、その下層はムガル (Mughal, M. R.) によって、初期ハラッパー文化と規定された。その文化はハラッパー文化へと引き継がれる蓋付きの貯蔵容器や短頸壺を特徴とする土器群を持ち、稜堡を伴う周壁に囲まれた城塞部と市街地の分離、日乾燥瓦の規格化、三角形陶板の出土、そしてその土器文様などから、インダス平原に展開するハラッパー文化の初期段階であると考えられている。この考え方には、今ではそのまま受け入れられない点もあるが、たびたび氾濫する大河流域を開発し、ハラッパー文化と共に通する文化的側面を持つ文化として、文明の初期段階と位置づける研究者は多い。

こうした初期ハラッパー文化の地方的変異と考えられているカーリーバンガン (Kalibangan)、ソティ (Sothi)、シスワル (Siswal) 遺跡がパンジャーブ地方東部からラージャスタン (Rajasthan) 地方北部にかけての地域にある。ガッガル川左岸のカーリーバンガンは、ハラッパー文化期の城塞部下の地山上に厚さ1.6mの初期ハラッパー文化層を持ち、そこにはすでに城塞と思われる遺構のほか、居住域を囲う周壁が巡らされ、周壁の外には耕作地を示す畝溝が発見されている。住民は周壁内に集住しつつも、直接農耕に從事していたのであろう。コート・ディジー遺跡と同様に、大河の氾濫が作り出したインダス平原地域に現れたこうしたコート・ディジー文化は、肥沃な冲積地の開発を急速に行い、権力機構の存在を示す城塞を市街地と分離して持つ多くの町邑を生み出したが、それは突然に現れたわけではない。ハラッパーの南西74km、ラヴィ川 (Ravi

R.) 南岸に位置するジャリールブル (Jalipur) 遺跡もコート・ディジー文化層を持つ遺跡であるが、その下層のⅠ期（ハーカラー式土器文化期）は、骨製尖頭器や器壁の厚い粗製土器をもち、前4千年紀まで遡るインダス平原における農耕生活の端緒をそこに見ることができる。しかし、ジャリールブルⅠ期からコート・ディジー文化に至る過程には、いまだ不明な点が多く残されており、こうした文化とパローチスターーンの文化との関係を含めて今後の研究課題として残されている。

こうしたなか、近年ガッガル＝ハーカラー涸河床沿いのチョーリスターーン (Cholisthan) 沙漠地域に、ハーカラー式

土器文化期からコート・ディジー文化、そしてハラッパー文化と後期ハラッパー文化の数多くの遺跡が発見され、それぞれに文化的継続性があるのではないかと注目されている。

しかしながら、城塞と市街地を分離し、煉瓦の規格化を行い、社会的規制と階層化の中で文明形成へ向けて平原部を開拓したコート・ディジー文化諸遺跡の用いた煉瓦は日乾燥瓦であり、ハラッパー文化が焼成煉瓦を大量に用いた点に両文化の差異が端的に示されている。つまり、コート・ディジー文化が初期ハラッパーであるとした場合、インダス文明を支えたハラッパー文化への文化的変容の要因をどこに求めるかが肝要になる。

インダス文明

インダス文明の形成について、筆者は上記のように交易ルートの把握をめぐるパローチスターーン地方の町邑遺跡とのせめぎ合いのなか、初期ハラッパー文化がインダス文明を作り上げたハラッパー文化へと変容していったと想定している。ルートの把握を含めた交易が文明の一要素であるだけでなく、文明成立の要因であったと考える。さて、インダス文明については、これまでに欧文を中心にして、多くの概説書が刊行されているため、ここでは多くを述べないが、近年注目されている二つの調査に触れるにとどめたい。

一つは、インダス文明遺跡として有名なハラッパー遺跡での調査である。ハラッパー遺跡は、1933-34年に初めて調査発掘されたのち、小規模なトレンチ調査を除いてほとんど手を付けられていなかったが、1986年より故デイルズ (Dales, G. F.) を団長とするアメリカ隊が再度調査を行っている。現在も進められている今回の継続調査は、文明期の都市形態と社会組織を解明するとともに、文明期以前のハラッパー遺跡の文化を探ることに主要な眼目を置いている。その中間報告によれば、かつてウィーラーが城塞部に入れたトレンチの下層で発見され、後にコート・ディジー文化とされていた文化層を積極的に初期ハラッパー文化期とし、その始まりを前3300年、都市期のハラッパー文化を前2600年ごろより始まり、前1900年まで続いた後に後期に推移し、前1700年ごろに衰退したとする。その中でも、従来の土器研究において、都市期とされていた時期は彼らの時期区分によれば、前2200年までの都市期の第2文化期までであり、都市期の最後である第3文化期を彼らの都市期に入れることで、H墓地文化と呼称してきた後ハラッパー文化を後期ハラッパー文化ととらえ直していることが注目される。それは、ここ数年の間、前2500～前1800年と考えられていたインダス文明の存続時期をよりさかのぼらせると同時に都市文明としての期間を短縮させる一方、イ

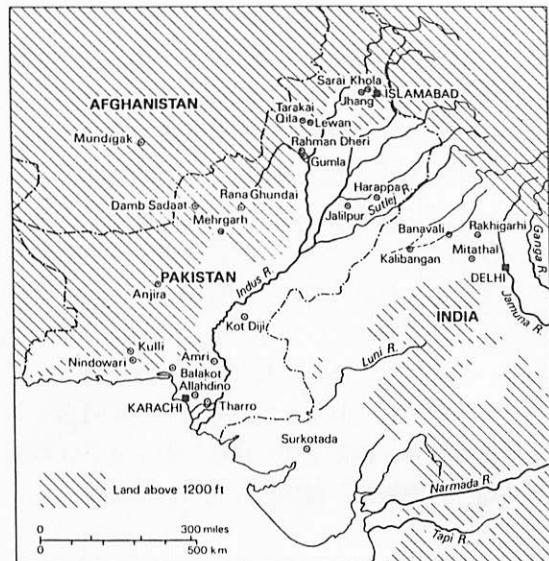


図1 初期ハラッパー期遺跡分布図

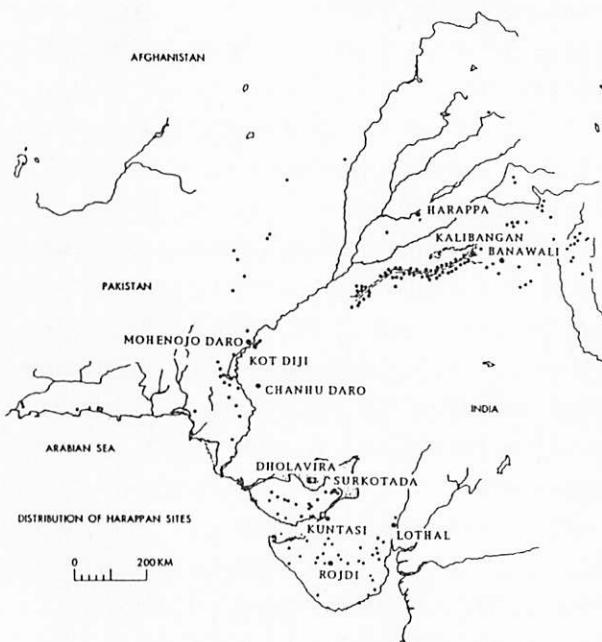


図2 インダス文明主要都市遺跡位置図

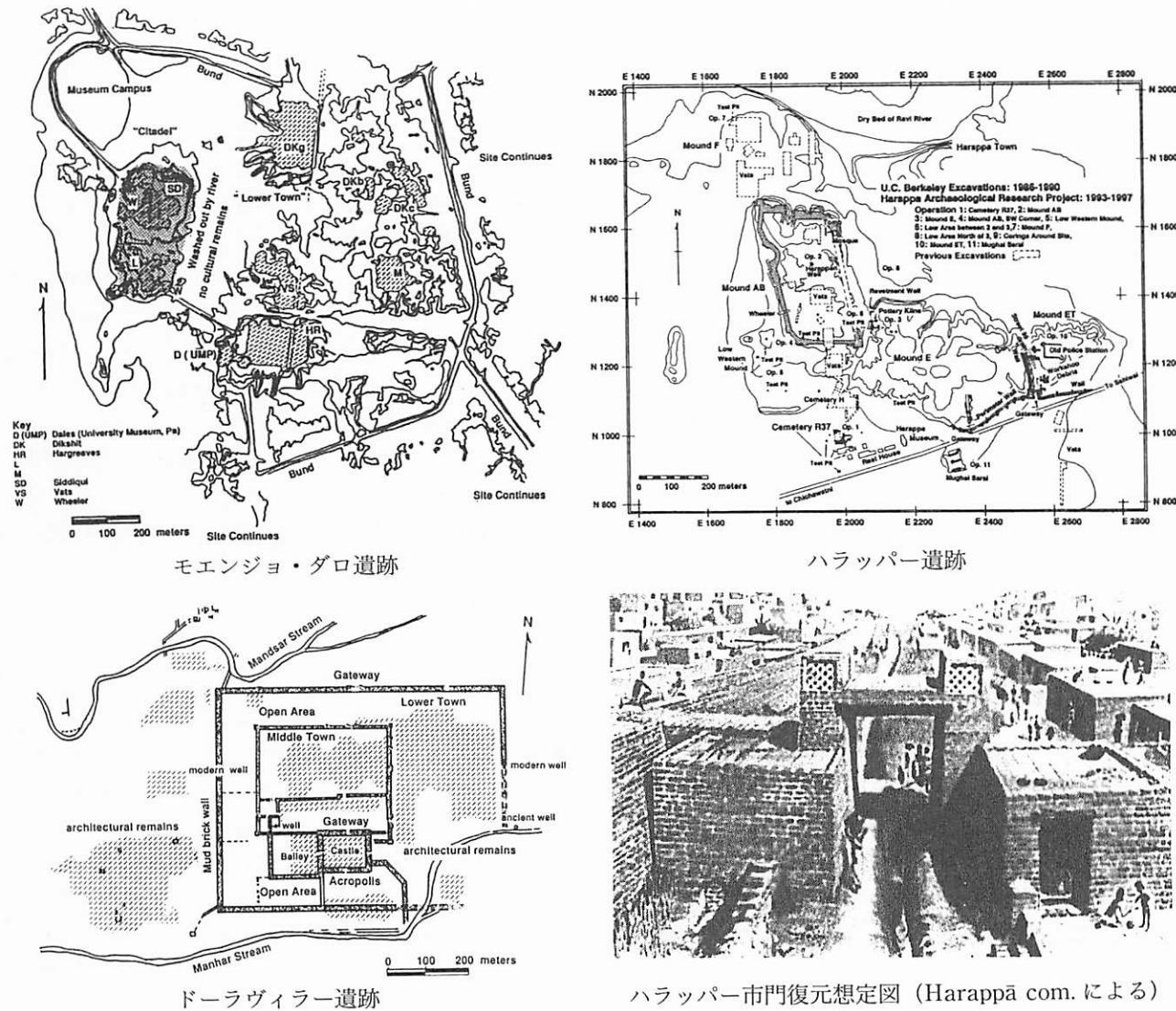


図3 インダス文明都市遺跡の概略図と想像復元図

ンダス文明の基層文化が文明衰退後も引き継がれていたことを主張している。しかしながら、前1800年前後の時期に初めてインド亜大陸に現れる印欧語族の文化と文明衰退期の後期ハラッパー文化後半以降の人びとがどのような係わりをもっていたかについては、つまびらかではない。

他方、インダス文明域の南東に位置するドーラヴィラー (Dholavira) は、インド共和国内のサウラーシュトラ (Saurashtra) 半島部のカッチ湿原 (Rann of Kacchi) の中にあるカディール (Khadir) 島に、1960年代に発見されていた遺跡である。現在でこそ湿地に浮かぶ島に立地するが、かつてはこの湿地全体がアラビア海の下に沈んでおり、インダス川の東を平行して南流していたガッガル=ハークラー川の河口に対面していたとされる。

1989年より発掘が進められているが、その規模は調査された遺跡の中では、ハラッパー遺跡に次ぐ周壁を持つ都市遺跡と考えられている。また、踏査のみであるが、モエン

ジョ・グローを凌ぐガンウェリワーラー (Ganweriwala) 遺跡がモエンジョ・ダローとハラッパー遺跡との中間にあたるガッガル=ハークラー河畔にあるとされている。これらモエンジョ・ダロー、ハラッパー、ドーラヴィラー、ガンウェリワーラーの4遺跡は、ほぼ直線的には等距離にあり、文明域の統治を分担していたのではないかとの意見もある。実際、ドーラヴィラー遺跡は周壁に囲まれた居住区の中の基壇上に城塞部が設けられる二重構造をしており、モエンジョ・ダローやハラッパー遺跡にみられる城塞部と一般居住区域が東西に分離して配置される都市レイアウトと異なる。こうした城塞と一般居住区が分離しない遺跡はドーラヴィラーのあるサウラーシュトラに多く見られ、ポセール (Plssehl, G. L.) はこれらの遺跡をサウラーシュトラの現地読みからソーラト・ハラッパー文化 (Sorath Harappan) と呼んでいる。

しかしながら、単純に遺跡の規模やそのレイアウトから

文明域の中におけるその文化的差異を強調するには、早急過ぐる觀が否めない。なぜならば、インダス文字を刻んだ印章の少なさや、メソポタミア地域にまで交易によってもたらされた5cmを超えるようなインダス文明特有の管玉がほとんど見られないというドーラーヴィラー遺跡出土遺物の様相は、モエンジョ・ダローやハラッパー遺跡とはやはり異なる政治的・経済的状況を示しているように思われる。文明域を4分割して統治していた遺跡ではないようである。かつてはガッガル=ハークラー川の河口に面したアラビア海に浮かぶ島に位置したドーラーヴィラー遺跡は、海上交易の拠点としての役割を担った都市遺跡であり、文明域を統治する機構はモエンジョ・ダローやハラッパーにあったようだ。

ドーラーヴィラー遺跡出土土器を見ると、ドーラーヴィラー遺跡の最下層である文明期以前にはバローチスタン農耕文化のアムリーやナールの土器と類似した器形と彩文を持ちながらも白色彩文を特徴としていた。その白色彩文は、文明期に入り、土器群がハラッパー式土器にとって代わられるものの少からず存続する。そしてこのサウラーシュトラ半島周辺においては、インダス文明衰退後に白色彩文を特徴とする黒縁赤色土器（アーハール土器またはバナース土器）が現れ、インダス文明期以前の白色彩文伝統の再出現をみる。このように、ハラッパー遺跡のあるパンジャーブ地方が後期ハラッパーを経て衰退していく一方、ドーラーヴィラーのあるグジャラート地方では文明の衰退とともに文明以前の基層文化が次第に頭をもたげて地方化を遂げる姿をとっている。

ハラッパーとドーラーヴィラーの遺跡が、文明期にあっては異なる役割を果たしつつも、文明衰退後には、インダス文明期とそれ以前の基層文化を交えながら展開したのであり、かつて南アジア史における「徒花」とされたインダス文明が南アジアの文化展開に大きな役割を果たしたこと確かである。

以上、長々と筆者の理解するインダス文明の前史と近年の調査成果を記してきたが、これでは全くインダス文明の理解には役立たないとする諸先学と諸兄には、以下に掲げる文献解説と2000年に開催される「インダス文明展」をご参考にしていただきたくお願い申し上げる。

南アジア考古学全般

◆ Allchin, Bridget and Raymond 1968 *The Birth of Indian Civilization-India and Pakistan before 500B.C.* Middlesex: Penguin Books. 365p., 32plts., 75figs. and maps. 石器文化を専門領域とする Bridget と主に南インドの新石器文化から金石併用器を専門領域とする

Raymond の夫妻によって書かれた南アジア考古学の概説書。専門領域の異なる二人の著者によるだけあって、叙述はきめ細かく、また北インドに限らず、広く南アジアを見通している。本書の特徴は後半部の Patterns of settlement, Economy and agriculture, Craft and technology, Art and Religion の各章に描き出された人々の生活を彷彿とさせる記述である。

- ◆ Fairervis, W. A. 1975 *The Roots of Indus Civilization-The Archaeology of Early Indian Civilization, 2nd Edition.* Chicago: The University of Chicago Press. 480p., 60plts., 75figs., 28maps. インダス文明を主題に据えたインド亜大陸先史文化の概説書。本書の特徴は、バローチスタンの先史文化調査に豊富な経験を持つ著者が、旧石器文化から解き起こしてガンジスに都市文明が現われるまでの亜大陸の歴史的変遷をを記す中で、丘陵地域の先史農耕文化からどのようにして平原部におけるインダス文明が形成されたのかを、1.外的影響、2.亜大陸内部の環境、3.社会的準備の3点を強調しながら「閉鎖的体系」と「開放的体系」というシステム論で解き明かそうとするところにある。
- ◆ Ghosh, A. (ed.) 1989 *Encyclopedia of Indian Archaeology, 2 Vols.* New Delhi, Indian council of Historical Research, 883p. インドを対象にしてはいるが、その内容は南アジア考古学の諸文化および遺跡・遺物を概観した事典である。これにより簡単に遺跡・遺物名・文化の個別事項を検索できる。大分な大きさであり、価格も比較的高いために個人入手には躊躇するが、便利な事典である。
- ◆ ターパル, B. K. (小西正捷・小磯学訳) 1990『インド考古学の新発見』雄山閣, 215p. ダーニー, A. H. (小西正捷・宗墓秀明訳) 1995『パキスタン考古学の新発見』、157p. 両書は最新資料を盛り込んで、ユネスコより出版されているアジア各国別の考古学概説書のうちの二冊を翻訳したものである。「新発見」と名付けているように、その内容は、過去になされたインダス文明の発見や仏教遺跡の発掘に関する記述はさらりと流し、研究史を踏まえたうえで新資料を豊富に盛り込んだ論議を開拓している。両者を合わせれば、南アジア考古学の一応の概観が得られることになる。

インダス文明関連

- ◆ Dhavalikar, M. K. 1995 *Cultural Imperialism-Indus Civilization in Western India.* Books & Books. New Delhi. 247p. グジャラート産出の資源リストからメルッハをグジャラートに比定したうえで、インダス流域のインダス文明がグジャラートへ進出した様子を、前期真ハラッパー期の交易路管理を行う遺跡だけによる点の

維持、後期真ハラッパー期の交易拠点と農耕生活遺跡が現われて地域の掌握へと移行したと描く。

- ◆ Gupta, S. P. 1996 *The Indus-Saraswati Civilization, Origins, Problems and Issues.* Pratibha Prakashan Delhi. 204p., 16plts. インダス文明の形成・発展・衰退を主な問題に据えた概説書。インダス文明をインダス流域だけでなく、サラスヴァティーを含めた地域、とくに後者に比重を置いた文明であったことを強調する。
- ◆ Jansen, M. (ed.) 1987 *Fogotten Cities on the Indus, Early Civilization in Pakistan from the 8th to the 2nd Millennium BC.* Mainz: Verlag Philipp von Zabern. 259p. ユネスコのモエンジョ・ダロ保存委員会の援助のもと、1987年6月ドイツのアーヘンを皮切りに30ヶ月にわたってヨーロッパ各地を巡回して開かれたインダス文明特別展示会の解説書。解説書はその題名にあるようにパキスタンの先史時代から解き起こし、文明の形成とその在り方を、現在の南アジア研究では豊富なフィールド経験を持つ著名な執筆人による22編の論文で描き出している。現時点におけるパキスタンの新石器時代からインダス文明に至る期間の考古学研究の成果を豊富なカラー図版によって知るには格好の書である。また本展示会は遺跡崩壊の危機に瀕しているモエンジョ・ダロ救済を呼びかける編者 Jansenn, M. の Save Mohenjo-Daro! なる文章で締めくくられている。
- ◆ Kenoyer, J. M. 1991 *The Indus Valley Tradition of Pakistan and Western India.* *Journal of World Prehistory* 5/4: 331-385. インダス文明に関する用語規定、年代、地理的環境、気候、都市化、国家形成、居住形態、農耕、建築、交易、工芸、宗教、儀礼、社会組織、墓制、文明の解体と地方化など、研究の全般にわたる論議を簡潔に見渡し、豊富な文献目録がそれを補強する。これまでのインダス文明研究の「研究史」概説として手軽に利用できる論文であると同時に、著者の得意な研究分野である工芸を中心とした新たな視点でのインダス文明論でもある。
- ◆ Mughal, M. R. 1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan (c. 3000-2400 B. C.), Ph. D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Pennsylvania, Philadelphia.* Univ. Microfilms International, Ann Arbor, Michigan. インダス文明研究において、その形成の問題を語る時に必ずと言ってよいほど引合に出される論文である。著者は、この論文でそれまではハラッパー文化に先行すると考えられていたコート・ディジー文化を初期ハラッパー文化と規定し、紀元前3500年まで遡るハラッパー文化は以後次第に発展して紀元前2300年頃にイ

ンダス文明を築いたと主張する。これ以後コート・ディジー文化をハラッパー文化の初期段階と認める者と、ハラッパー文化とは異なる先ハラッパー文化とする研究者の間でインダス文明の形成問題に関する見解と用語が二分された状態となっている。パキスタンとアメリカの研究者の内にはムガルの見解が一般的となっている。ハラッパー文化、インダス文明の起源論に興味をお持ちの方々にとって、この論文は避けて通れない。

- ◆ Mughal, M. R. 1997 *Ancient Cholistan Archaeology and Architecture.* Ferozsons LTD. 170p. ガッガル＝ハクラ川の流路変更に伴うハラッパー文化遺跡の立地移動変遷を追うなかで、引き続く流路の移動は社会的、経済的、政治的そして他のレヴェルにおける頻繁な適応と再構築を迫り続けたとして、文明の形成と衰退の一要因を河川流路移動に求めている。
- ◆ Ratnagar, S. 1991 *Enquiries into the Political Organization of Harappan Society.* Pune, 211p. インダス文明を盛期ハラッパー文化としたうえで、モエンジョ・ダロ、ハラッパー、ガンウェリワーラーによる中心地域と移植・移入地である周辺地域とに分けて、その政治的形態を国家、帝国と考える。ただし、その政治体系が一元的ものであったのどうかには触れていない。
- ◆ ウィーラー, M. (曾野寿彦訳) 1966『インダス文明』みすず書房、220p. *The Indus Civilization, 2nd edition (Supplementary Volume to the Cambridge History of India)* London. 1960の翻訳書。インド亜大陸考古学の父ともいえるウィーラーによるインダス文明の概説書。インダス文明の解釈とイメージを良くもあしくも定着させ、その後の研究にも多大な影響と問題提起とを与えた書である。初版は1953年と古く、モエンジョ・ダロやハラッパーなどの主要都市遺跡の報告書が出そろった後に書かれた。本書はウィーラーならではの手ぎわの良い整理と文体で、読むものを引き込む。中でも先史農耕文化からインダス文明への展開の記述にあたっては「アイデアは飛翔する」という有名な、また多々問題を後世に残す言葉によって都市文明の形成における西アジアとの関係を述べている。インダス文明に興味を覚える方々には、本書は必読の書である。
- ◆ 辛島 昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一 1980『インダス文明—インド文化の源流をなすもの』NHKブックス、日本放送出版協会、242p. 言わずと知れた邦文による唯一のインダス文明の概説書である。その内容は基本的に大きな変更を加えるべき点はないが、出版以来既に20年を経、多少の加筆と訂正を必要としている。本書の特徴は、執筆陣の構成からも窺われるよう先史時代と歴史時代とを一貫した南アジア史としてどのように結び

付けるかとする点であり、その意図は副題に示されている。

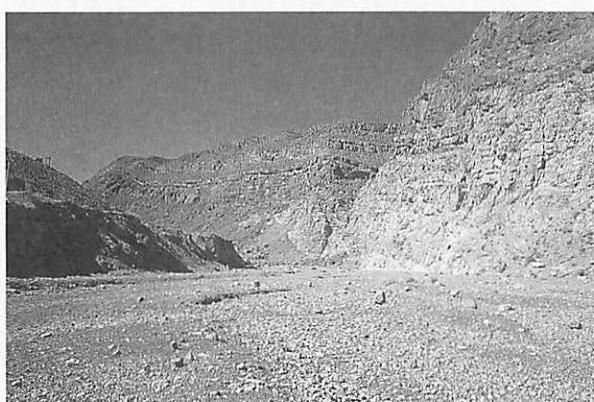
◆小西正捷 1970a 「インダス文明とアーリア世界の背景」『岩波講座 世界歴史3』古代3、岩波書店、pp. 171-208。インダス文明の形成と、文明がその後のインドに与えた歴史的影響について、はじめて正面から取り組んだ労作である。インダス文明の形成と文明以後の文化的展開に関する論議に多くの紙数が費やされている。なかでも、それまでの南アジア研究において、ややもすれば等閑視されていた中央インドと西インドの先史文化をもインダス文明を通して視野にいれた画期的論考である。ただし、歴史講座のなかの一編を占める論文である性格から、考古学の論考としてはやや物足りない感じが残るのはやむをえないであろう。

◆曾野寿彦 1974 『西アジアの初期農耕文化—メソポタミアからインダスまでの彩文土器の比較研究』山川出版社、281p、挿図27。表題にあるように、西アジアからインダス流域までの紀元前6千年紀から前3千年紀に及ぶ先

史農耕文化を、その編年を基礎として、それぞれの文化に見られる彩文土器の文様を詳細に比較し、論じている。南アジアに問題を絞れば、インダス文明形成以前のバローチスタン初期農耕諸文化をイラン高原との関係を基に考察し、その年代・系譜・文化領域的問題の基礎を築こうとしている。土器を学ぶ者はもとより西アジアから南アジアにかけての先史文化に感心のある向きの方には必読の書であろう。

インダス文明以後

◆小西正捷 1965 「ハラッパ文化後期および後ハラッパ文化の諸問題」『民族学研究』30/2、pp. 171-174。短い論文ではあるが、ハラッパー文化の後期から後ハラッパー文化の展開を論じるなかで、インダス文明の崩壊とアーリア語族の南アジア侵入とを安易に結び付けることの危険性とともに、そうした論議への反証を試みる。以後の著者のインダス文明崩壊と南アジア文化に対する論考の基本をなす。



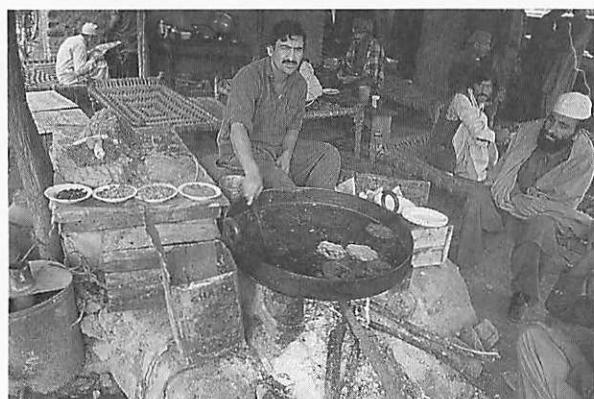
ボーラン峠

宗碁秀明

鶴見大学非常勤講師

Hideaki SHUDAI

Tsurumi University



Peshawar



Multan